岩手・志羅山（しらやま）遺跡

1　所在地　岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山
2　調査期間　第九四次調査　二〇〇六年（平18）四月～六月
3　発掘機関　平泉町教育委員会
4　調査担当者　鈴木江利子・島原弘征
5　遺跡の種類　屋敷跡
6　遺跡の年代　一二世紀、中世・近世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

志羅山遺跡はJR平泉駅西側に位置し、五〇〇m四方の広がりをもつ。現在は町役場や郵便局、銀行などの施設を有する市街地であり、駅から七〇〇m西にある特別史跡毛越寺に向かう県道が遺跡を横断している。近年、この県道の拡幅に伴う発掘調査や、住宅建設などに伴う調査の結果、一二世紀奥州藤原氏時代の遺構・遺物のほか、中世や近世の資料も増えている。

（一　関）

今回の調査区は志羅山遺跡の南西端に位置する。調査前は水田として使用され、平坦であるが調査区外北側の水田は一段高い広がりとなっている。調査面積は八五〇㎡。検出遺構は掘立柱建物・土坑・溝などで、遺構の年代は、一二世紀、中世、近世である。

木簡（笹塔婆）は、調査区北部で検出した東西方向の溝の埋土中位の広い範囲から、計二一点出土した。溝の検出長は二五mで、東西の調査区外に続いている。幅は約二・〇m、深さは一・〇～一・三m、断面形はV字状を呈する。溝底は東にわずかに傾いており、笹塔婆出土層は砂を含む流水の痕跡を示す。

笹塔婆の年代は、その形状や大きさ、梵字「𑖩」（バン）と「大日如来」が同時に書かれていること、共伴遺物の年代などから、一三世紀から一四世紀にかけてと考えられる。溝からの共伴遺物には、かわらけ、陶器、磁器、木製品、板碑などがある。

なお、調査区の北七〇mの水田の傍には、元応三年（一三二一）の紀年銘をもつ板碑が立っている。また、「𑖩大日如来」の笹塔婆としては、福島県荒井猫田遺跡出土のものに多数の類例がある（本誌第二一・二三・二六号）。

8　木簡の釈文・内容

(1)　（バン）「𑖩　大日如来　(271)×24×2　061

(2)　（バン）𑖩　大日如来　(265)×24×3　061

(3) 「（バン）南无大日如来」 283×19×6 061

(4) 「（バン）大日如来」 319×28×2 061

(5) 「（バン）大日如来」 288×25×4 061

(6) 「（バン）大日如来」 319×28×2 061

(7) 「（バン）大日如来」 318×28×3 061

(8) 「大日如来 (270)×22×3 061

(9) 「□□□」 (292)×23×5 061

(10) 「（バン）大日如来」 324×22×2 061

(11) 「（バン）大日如来」 329×18×2 061

(12) 「（バン）大日如来 (269)×27×2 061

(13) （バン）大日如来 (259)×26×4 061

(14) 「（バン）大日如来」 326×25×3 061

(15) 「（バン）大日如来 (264)×24×2 061

(16) 「□（ナカ）□□□（大日如来カ）」 331×22×2 061

(17) 「（バン）大日如来」 304×25×3 061

(18) 「（バン）大日□□（如来カ）」 322×30×3 061

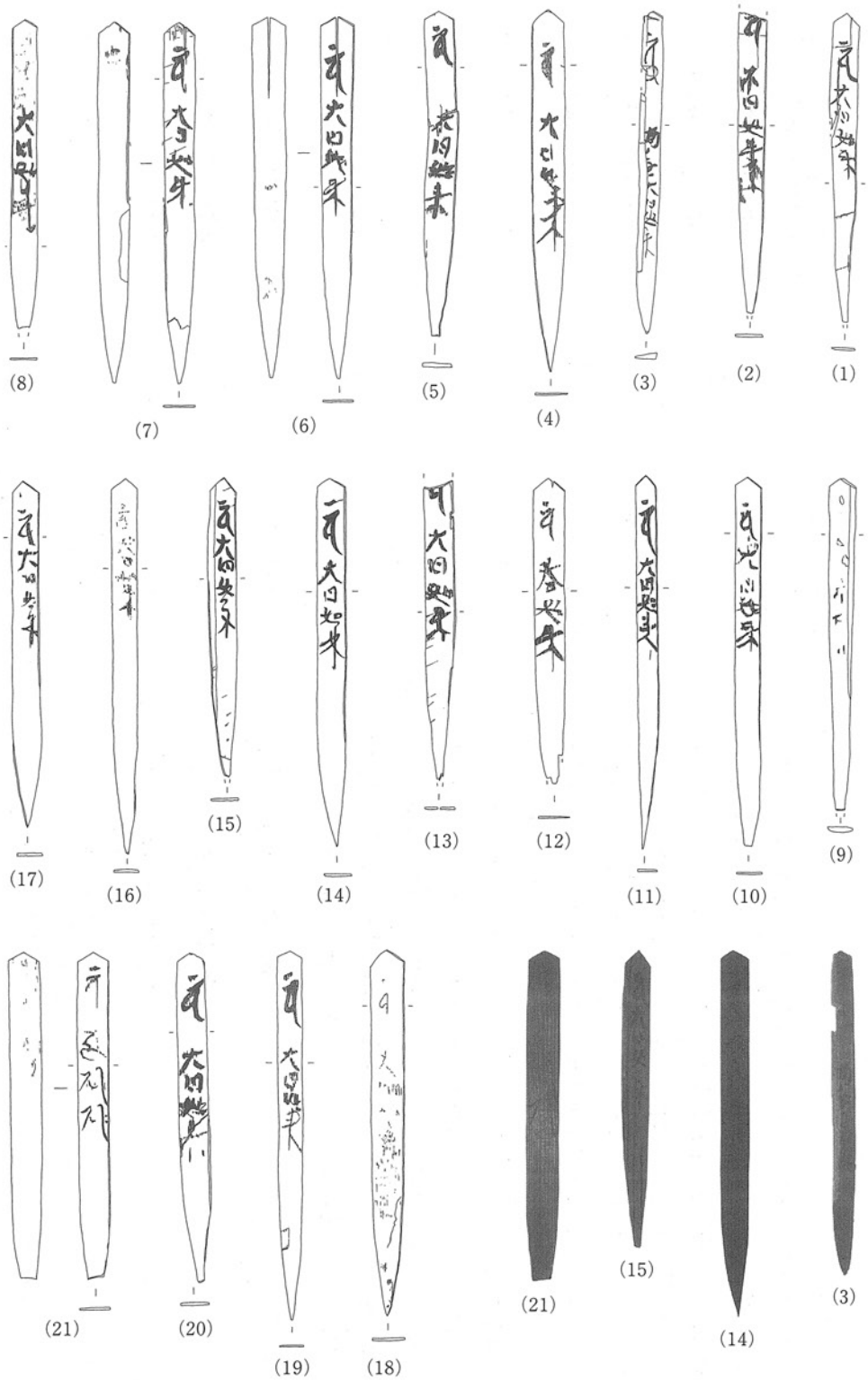
(19) 「（バン）大日如来」 325×21×2 061

(20) 「（バン）大日如来」 289×20×3 061

(21) 「（バン）（キリーク）（サ）（サク）」 286×27×2 061

いずれもスギ材で、頭部を山形に加工し下端を細く尖らせる形状も類似する。(2)(13)は破損により頭部の原形は不明。(1)(2)(8)(9)(12)(13)(15)は、下端部が僅かに破損している。(10)(21)の下端は、破損した痕跡がないことから、元々尖らせていなかったとみられる。文字はほとんどが梵字「（バン）」と「大日如来」のセットで、判読が困難であっても推定が容易である。このうち、(3)(9)(21)は例外である。(3)は文字の半分が削られているが、「南无大日如来」と判読できる。(9)は墨書らしい痕跡を示すが判読に至らない。他より厚みがあり、面取りされた様子からは、用途が違う可能性もある。(21)は他と異なり梵字だけが四文字書かれている。(16)(18)は文字が不鮮明であるが、他と同じ墨書であろう。また、(6)(7)(21)の裏面には、シミか墨痕かわからない痕跡が認められる。(20)は近接地から出土した二片が接合した。

（鈴木江利子）


(8)
(7)
(6)
(5)
(4)
(3)
(2)
(1)
(17)
(16)
(15)
(14)
(13)
(12)
(11)
(10)
(9)
(21)
(20)
(19)
(18)
(21)
(15)
(14)
(3)